



2008年(平成20年)
3月号(No. 754)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

公益法人制度改革と日本山岳会 新法に合わせ まず定款改定	1
関西支部の四国分水嶺踏査 感動と発見の32日間・250キロ・4 日本山岳会入会当時の思い出とサロシ登山家	6
インターネット小委員会	8
活動報告	10
学生部指導委員会/図書委員会/ 資料映像委員会	
東西南北	12
スキーの原点へ ヒラリーと画家の清野さん マナーある宿泊を 山旅人の日記 愛憎—北の大地の岳徒 俳句	
書評・『山岳』第百二年を読む	16
図書紹介	18
会務報告	20
ルーム日誌	21
会員異動	21
新入会員	21
図書受入報告	21
INFORMATION	22

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

公益法人制度改革と日本山岳会 新法に合わせ まず定款改定

公益法人化プロジェクトチーム 佐野忠則

この12月に施行される公益法人制度改革法によって、社団法人日本山岳会は大岐路に立たされている。存続の根幹にかかわる問題だけに、十分な討議が必要だと思われる。いくつかの問題点を含めてその現状を、プロジェクトチームの佐野忠則氏に中間報告してもらう。

日本山岳会は創立以来今年で103年目に入っていますが、社団法人になったのは1941(昭和16)年のことです。以来、民法第三十四条に基づく「公益法人」として定款を定め、活動を続けてきました。

しかし、いわゆる構造改革に沿って平成18年6月に公布され、この12月に施行される公益法人制度

改革法により大きな変化を迎えます。12月以降5年間のうちに、新法でいう「一般社団法人」になるか、それとも国の認可が必要な「公益社団法人」への道を選ぶか、あるいはNPOなど第三の道か……。

否応なしに選択を迫られます。

制度改革と選択肢

民法第三十四条が定める従来の

「公益法人」(公益に関する社団法人は財団で営利を目的としないもの)は、公益に関するかどうか主務官庁(注1)が判断したうえ、その裁量によって設立の認可をし、税制面で次のような優遇措置が与えられてきました。

*税法上の収益事業(33業種)以外是非課税。

*金融収益課税も非課税。

*収益事業への法人税は軽減税率を適用。

*みなし寄付制度の適用(注2)。

*特定公益増進法人格を取得すると、個人や法人の寄付金控除が可能。

現在、わが国における社団法人と財団法人の数は実に2万5000法人にも及びます(平成18年時点)。ひと口に社団法人や財団法人

といっても、文字通り公益性の高い活動を通して社会貢献をしている公益法人がある一方で、既に民法制定から100年以上が経過し制度疲労を起しているという指摘や、公益法人の設立認可プロセスにおける主務官庁の裁量の強さや監督の不透明さから、いわゆる官僚の天下り先となっている公益法人もあるなど、数々の問題点が指摘されてきました。

こうした背景のなかで、公益法人制度改革が進められているわけですが、具体的には、政府の推進する公益法人改革は、従来の主務官庁による認可・監督制度を改めて、登記だけで設立できる制度に転換し、公益法人を役所の関与から自由にしようとするものです。登記だけで設立できるのが「一般

「一般財団法人」です。ただし、従来のように無税で保護されることはなく、企業と同様に納税の義務があり、さらに公益目的の計画の策定・実施、それに公益目的財産残額がゼロになるまで、毎年の進捗状況の報告が義務づけられます。

また、数ある法人のなかから、特に公益性(社会貢献度)の高い法人についてはこれを「公益社団法人」「公益財団法人」とし、税制などで優遇することにしました。

国の「公益等認定等委員会」による認可制で、「公益社団法人」となれば社会的評価、地位が一段と高まることは確かです。ただし、認可を受けるハードルはきわめて高いとされています。

以上二つの道のほか、NPO法人化、他法人との合併などという第三の選択肢もありますが、いずれの場合も「公益目的支出計画」の策定、実施を求められています。なお新法が施行されれば、従来どおりの形で日本山岳会を運用していくという選択はありません。

「一般法人」か「公益法人」か
法制上の一般論を離れて、わが

社団法人日本山岳会に当てはめて考えます。

まず「一般社団法人」の場合です。大きな問題は当山岳会が一般社団法人に移行する場合は、これまで無税で蓄積した財産を公益目的の事業に支出する必要(公益目的支出計画という)があるという点です。東京・四番町のルームや備品、図書、上高地の「さんけん(山岳研究所)」といった現有財産の安定的確保が困難になると思われるます。宮下秀樹会長が「山」1月号の新年の挨拶で「会員一人ひとりの会費納入と資産蓄積の努力によって築かれてきた山岳会の存立(資産を含む財政基盤が危うくなる)」と述べているのはこのことです。

一方の「公益社団法人」の場合です。「公益等認定等委員会」に申請して公益認定を受け「公益社団法人」となれば資産を失う心配はありません。ただし認可を受けるには次のような「公益認定の基準」をクリアする必要があります。

＊法で定める公益目的事業(23事業)を行なうことを主たる目的としていること。

＊公益目的事業比率が、費用で計って100分の50以上(半分以上)



「高尾の森づくり」など、公益性が高いと言われる森林整備運動

であること。

＊経理的基礎および技術的能力を有すること。

＊法人の関係者に特別の利益を与えるものでないこと。

このうち「法で定める公益目的事業(23事業)」を日本山岳会の定款第2章「目的および事業」に照らし合わせてみますと、〈学術、科学振興〉〈文化、芸術振興〉〈児童、青少年の健全育成〉〈教育、スポーツを通じて国民の心身の健全発展に寄与〉〈国際相互理解の促進〉〈自然環境保護〉など8つの事業目的が、適合します。

新制度は平成20年12月に施行されて、申請の受付が開始されます。

そして5年後の25年11月にはすべての法人について移行期間が終了します。5年以内に進路を決める必要があるということです。移行期間中、既存の社団、財団法人は特例民法法人と呼ばれます。

日本山岳会はどうする

現在ある社団法人、財団法人などの公益法人のうち、公益認定基準に適合するためのハードルは非常に高いといわれています。法人の多くを占める業界団体などは適合困難と予想されていますが、創立以来100年余、日本のアルピニズムをリードするとともに登山技術の普及、自然保護活動の推進などに貢献してきた日本山岳会の場合は、認可への道は開けているといえます。

公益認定を受け、幅広い活動を続ける方向で宮下会長はじめ9名のメンバーで「公益法人化プロジェクトチーム」を発足させ検討を開始しています(注3)。

問題点としては、公益目的事業の明確化および更なる具体化、本会を支えてきた各支部の独自の活動を継続するなかで全体として公益認定を受けられるような仕組み



救急救命法の講習なども公益性が高い

の検討、などが挙げられます。しかしながら、繰り返しますが公益認定のハードルは高く、また仮に公益認定を受けたとしても、公益社団法人としての永続的な活動が可能かどうかを見極めたうえで進路を決める必要があります。

会員の皆さんのアイデアとご協力が不可欠です。今後とも皆様のご協力をお願いします。現在、手続きなど不明な点が多くありますが、明らかにされ次第、プロジェクトチームで検討し、皆さんにお知らせしていく予定です。疑問やご意見がおりの方は委員までご連絡ください。

定款変更のスケジュール

ところで、最終的な進路を決断する前に、新法の規定に基づいて、新法に適合する組織とするための手続きが必要となります。

このため平成21年5月の総会で1回目の定款変更(3ページの表を参照)(A)を行ないます。これは一般社団法人となることではなくあくまでも法に適合させるための変更です。並行して、将来的にどの進路をとるかの検討を進め、公益社団法人を目指す場合は22年5月遅くとも次の年の総会で最終的な定款変更(B)を行なう必要があります。変更する定款の条項は別表のとおりです。会員各位のご理解を重ねてお願いいたします。

(注1) 本会の場合は文部科学省。

(注2) みなし寄付制度Ⅱ公益法人が収益事業によって得た資金を非収益(公益)事業に支出した場合、一定割合を収益事業にかかる寄付金とみなして損金算入できる制度。

(注3) プロジェクトチーム委員Ⅱ
竹内哲夫(委員長)、村木潤次郎、河野 長、藤本慶光、佐野忠則、宮下秀樹、鰐坂青青、神崎忠男、吉永英明(19年7月の理事会で承認)

「一般社団法人」と「公益社団法人」の比較

	一般社団法人	公益社団法人
メリット	①国の指導・監督がなくなる。 ②公益事業にとらわれず、支部も含めた活動の自由度が増大する。	①社会的評価が格段に高まる。 ②寄付金控除等の税制上の優遇措置が受けられる特定公益増進法人になる。 ③JACの現有財産の安定的確保が図れる。 ④“森づくり”における公有地の借り受けが容易。
デメリット	①社会的評価が低下する。 ②税制上の優遇措置が受けられない(営利法人に対するとほぼ同様に課税される)。 ③JACの現有財産の確保が困難。公益目的支出により概ね2億円以上(推定)の支出が強制される。 ④“森づくり”における公有地の借り受けが困難になる。	①国の指導・監督が厳しくなる。 ②公益事業の推進を求められる。 ③収支における公益目的支出が、支出の50%以上と規定される。 ④“支部”の扱い及び“支部助成金”の扱いを検討しなければならない(支部助成金の使途の明確化)。

変更する定款の条項

A = 1 回目の定款変更 (21年 5 月)	B = 2 回目の定款変更 (22年 5 月以降)
● 理事会・会計監査人の設置規定 ● 代表理事・執行理事選任規定 ● 必要な設置目的変更、組織変更	● 名称(公益を冠する)規定 ● 認可取り消し時財産贈与規定 ● 清算時財産公益帰属規定 ● 公益目的不可欠財産に該当する財産がある場合、その指定、維持・処分の方法規定、など

* B=2 回目の定款変更項目は公益社団法人の場合を示しており、一般社団法人の場合は少し異なります。

関西支部の四国分水嶺踏査

感動と発見の32日間・250キロ

阪下幸一

日本山岳会創立100周年記念国内登山・関西支部の四国分水嶺踏査は06年5月にスタートした。32日間にわたる踏査のなかには、さまざまな出会いと感動があった。

踏査の概要、スタートは平石山

四国分水嶺踏査(太平洋側からアプローチ)は、06年5月から08年1月まで1年7カ月を要した。冬場を除き(最後の佐田岬は例外)計16回実施し、32日間の参加者は延べ295名に及んだ。

踏査に先立ち、06年5月26日、「徳島県立21世紀館」にて記念講演会を行なった。徳島市在住の尾野益大会員が「四国分水嶺の山々」と題して講演。瀬戸内海側からのアプローチ「讃岐山脈(香川、徳島、法皇山脈)、太平洋側からのアプローチ「剣山山系、石鎚山系、四国カルスト、佐田岬」のルートと山々の歴史、文化、特徴について語られた。今回の踏査では、太平洋側からのルート「剣山山系、石鎚山系、四国カルスト、佐田岬」をすべて歩いた事になる。

続いて、重廣恒夫支部長が「エグレストから四国分水嶺へ」と題し講演。これまで挑戦してきたヒマラヤの山々を紹介するとともに、日本山岳会100周年行事の中央分水嶺踏査に続く四国分水嶺の意義、魅力について語った。

スタートは5月27日。剣山山系の東端に位置する徳島県の山・平石山だった。そこから剣山・三嶺へ。そして11月には吉野川を越え石鎚山系に入り、野鹿池山・登岐山・平家平・笹ヶ峰・瓶ヶ森・石鎚山・皿ヶ峰・三坂峠へとルートを延ばしていった。そして、08年1月27日、ついに目的の地・佐田岬に到達した。

豊かな自然との遭遇と感動

第3回2日目の午後は雨のため川成峠までで中止。8月10日に再



根元から枝分かれした大枝を四方に伸ばす八方ブナ

チャレンジとなった。この時登った天神丸、樫ノ丸ではヒメシヤラの大木に出合った。

新しい発見は四国のブナに出合ったことであつた。直径が1メートルを超える大ブナが群生していることにまず驚いた。しかも本州をしのぐ大木が多いことに再び驚かされた。それまで私は、関西の「ブナを植える会」の活動(主に兵庫県但馬地方にてブナ植樹)に20年余り関わってきた。その活動を通し、北限の松前や南限の大隈半島など登山を通じてブナを見てきたが、四国のブナは知らなかった。

特にブナの大木が多いのは高城山、天神丸、黒岩山(八方ブナ)、

大座礼山、権田山など。いずれも本州のブナと違って、根元から枝分かれして幹に負けない大枝を四方に伸ばしていた。大きな盆栽のように美しいその姿には感動した。

第8回5月のカガマシ山では、西の湿地でガマガエルの愛の営みに出合った。足の踏み場もないほどの数とその光景に、自然の豊かさをしみじみ感じた。

7・10回の山行からはヤブが多く苦戦した。なかでも、雨の中「四国のマッターホルン」と呼ばれる登岐山に登り、そこから東光森山までのルートではヤブに押し戻され苦しみだ。8・9回は林道でのテント泊もあつた。これも過ぎてみればいい体験となった。

季節の移ろいや歴史を感じて

季節の花々との出会いも楽しんだ。第1回目の山行では、ムサシアブミ、アワノミツバツツジが満開だった。2回目は落花した花の絨毯の上を歩いた。毎回が、魅力的な山々との出会いであつた。シヤクナゲの雪早山は特に印象深い。春から夏にはアケボノツツジ、ドウダンツツジ、コメツツジ、オオヤマレンゲ、シヨウキラン、キ



天狗岳頂上(石鎚山の最高峰)。東稜をクライミングして登った

レンゲシヨウマなど、多くの花々と出合った。秋、ブナの紅葉は山から里山へとモザイクのように染まり、とても美しかった。

山から歴史を学ぶこともあった。阿波藩の氷室跡(夏に藩主に献上のため)があった高根山。土佐藩が参勤交代に越えた笹峠。病人を戸板に乗せて運んだ川成峠。道路が整備されて廃道となった道。四国の集落は山腹に開け「こんな所に人が住んでいた」ということに感動した。

現在は過疎化が急速に進んでいる。先祖が長年かけて苦勞して築いたであろう石積み集落や段々畑には、杉の木が生え放題。里山

も荒れ、倒れたままの木々は放置され、村々の崩壊を見るようになって。過去に戻ることはできないが、今ある多くの資源を再利用できないものかと、そのたびごとに思った。

新たな挑戦にむけて

思いがけないサプライズもあった。昨年8月には阿波踊りに飛び入り参加。それも、踊りの名門「水玉連」にある。見よう見まねで初めて挑んだ阿波踊りであったが、それは実に楽しいものだった。

今回の踏破にあたり多くの方々にご協力をいただいた。特に、徳島市在住の久米・尾野両会員の多大なるご尽力には心から感謝申し上げたい。支部の活性化、地元の方々との触れ合い、四国の山を心と身体で感じ取ったことは大きな収穫であった。

4月より、太平洋側ルートに続き瀬戸内海側の分水嶺を鳴門に向けて、更なる新しい発見と感動の出合いを求めて再び歩き出す。

なお、踏査の詳細は関西支部HPを参照ください。

<http://www4.kcn.ne.jp/~jac-ks/>

日本山岳会創立100周年記念国内登山 四国分水嶺踏査 (06年5月～08年1月)

回数	実施日	行程	参加者数
第1回	06年5月27～28日	朝彦彦神社～平石山～中津峰山～(泊)～杖立山～旭ガ丸	31名
第2回	06年6月23～24日	旭ガ丸～柴小屋山～剣林道(泊)～旭の丸～雲早山～土須峠	20名
第3回1	06年7月22～23日	土須峠～砥石権現～高城山(泊)～川成峠(雨、午後中止)	17名
第3回2	06年8月10日	川成峠～当野石山～天神丸～樫ノ丸～にくぶち峠(再開)	8名
第4回	06年8月26～27日	にくぶち峠～一の森～剣山(泊)～次郎笈～丸石～三嶺	35名
第5回	06年10月28～29日	三嶺～西熊山～地蔵の頭(泊)～天狗塚～綱附森～京柱峠	17名
第6回	06年11月25～26日	京柱峠～弘瀬山～三方山(泊)～野鹿池山東峰～黒滝山	16名
第7回	07年4月28～29日	黒滝山～野鹿池山小屋(泊)～西峰～三方示山＝笹ヶ峰	16名
第8回	07年5月27～28日	笹ヶ峰～カガマシ山～中川峠(泊)～佐々連尾山～玉取山	15名
第9回	07年6月23～24日	玉取山分岐～兵庫山～登岐山～林道(泊)～黒岩山～野地峰	15名
第10回	07年7月28～29日	野地峰～大野三角点～水谷(泊)～東光森山～大田尾越	15名
第11回	07年8月25～26日	大田尾越～大座礼山(泊)～平家平～笹ヶ峰～寒風山～桑瀬峠	17名
第12回	07年9月22～23日	桑瀬峠～伊予富士～瓶ヶ森(泊)～伊吹山～東稜～石鎚山	15名
第13回	07年10月27～28日	石鎚山～二ノ森～堂ヶ森(泊)～青滝山～割石東山～割石峠	19名
第14回	07年11月23～24日	石墨山～陣ヶ森～上林峠(泊)～皿ヶ峰～黒森山＝三坂峠	17名
第15回	08年1月26～27日	高森山～雨包山～御在所山(泊)～鞍掛山～出石山～見晴山	22名
番外	07年4月29日 07年11月27日	高丸山登山口～高丸山～雲早山～土須峠(13名) 勘場橋～権田山～大ブナ～折宇谷山～勘場橋(5名)	1～15回 計295名

日本山岳会入会当時の思い出とサロン登山家

芳賀孝郎

お茶の水のルーム

加藤泰安先輩に連れられて、私が初めて日本山岳会のルームを訪れたのは、横有恒隊のマナスル初登頂の翌年、1957年5月のことである。お茶の水のルームは木造の建物であった。奥の方を見ると木の椅子が数脚あり、そこで談笑している数人の会員の姿が見えた。そのなかの一人が浦松佐美太郎氏であった。

私は、泰安先輩に「あの方は浦松佐美太郎さんですね」と尋ねた。すると「お前はなぜ浦松氏を知っているのか」と逆に聞かれた。「1953年エヴェレスト初登頂のメンバーであるノイスの『サウスコル』を、浦松氏が翻訳した本を読みました。登山中のノイス自身を含めた隊員の行動と心理描写に感激しました」と私は答えた。

「浦松氏はロンドン大学を卒業後、欧州に滞在して1927・28年ころ、松方三郎氏らとアルプス登山で活躍した一人である。今なお当時のアルプス登山の話をしている

サロン登山家である」と、サロン登山家の意味を私に説明している泰安先輩の前に、松方氏が突然現われた。浦松氏は、評論家であり、ウィンパーの『アルプス登攀記』の訳者でもある。日本山岳会会報の発行を提案し、1号から11号まで編集を担当した方でもある。

松方氏は、「泰安、お前は今、学生に向かってサロン登山家云々と言っていたようだが、ジョン・ラスキンについて教えてあげなさい」と言われた。松方氏が立ち去った後、私は恐る恐る「ラスキンという方はどのような人物ですか」と聞いた。泰安先輩は「ラスキンを知らない者は山岳会に入る資格がない。すぐに帰って勉強して出直してこい」と強い口調で、私への説教が始まった。私は、2週間後にラスキンの調査をして報告をしますと約束した。

ジョン・ラスキンと志賀重昂

私は、2週間後に泰安先輩に次のような報告をした。

ジョン・ラスキンは、英国の絵画評論家である。若くしてアルプスに出会い、その自然の魅力が脳裏に焼きついた。絵画の伝統である宗教画・人物画・静物画の流れのなかで、ラスキンは、自然美の風景を描いたターナーを「近世絵画論」で高く評価した。そして彼は、登山活動はまったくしなかったが、アルプスの自然の美を世に伝えた。多くの人々をアルプスの世界に引き寄せたのである。その登山界への影響力の実績により1869年、栄光の英国山岳会の会員に推薦された。

日本アルプスの開拓者ウェストンもラスキンの影響を受けていた。彼の著書『日本アルプス 登山と探検』で、日本の山はアルプスに比べ高くはないが、その山並みの美しさ、荘厳な森林、神秘的な渓谷について彼の表現は、ラスキンの自然美の評論にもとづくものであるといわれている。

日本では、志賀重昂がラスキンの近世絵画論を参考にして1894年、『日本風景論』を発表した。この本は日本の火山について詳しく説明している。かつ日本の風景が世界に類のない美しさを持つて

いる事を強調した地理書であり、自然美を求めての旅と登山を勧める本でもあった。志賀は、1917年英国王立地理学協会の名譽会員に推薦された。

1905年、日本山岳会を創立した小島烏水・高頭仁兵衛らもこの本を愛読し、大きな影響を受けた。志賀重昂は地理学者として日本の多くの地域を見て歩いたが、ラスキンと同じく登山をした記録はない。しかし、後日ラスキンと同様、彼の文章が登山奨励に大いに役立った功績で日本山岳会の名譽会員に推薦された。

このことから、私は英国山岳会も日本山岳会も自然や山についての優れた研究者ならば、登山実績がなくとも会員として受け入れられる気風があることを知った。

松方三郎氏の面接

上記の調査報告が評価されたのか、加藤泰安先輩の推薦により1958年の4月、京都大学学士山岳会チヨゴリザ遠征隊に参加する幸運に恵まれた。喜んでいた私に、泰安先輩からの連絡で、隊員の最終面接は、松方三郎氏が行なうので共同通信社へ行くように言われ

た。

松方氏の泰安先輩への説教を実際に見ているので、私は恐ろしさに全身緊張で固まり、心臓の鼓動を抑えて社長室に入った。

1・英語学力のテスト、2・登山技術のテスト、3・将来のリーダーとしてのテストなどの面接があった。語学力は、先輩が良くないので最初から期待していないと言われた。他の項目ではかろうじてパスし、チョゴリザ遠征隊へ参加した。

この年の11月6日、英国山岳会(AC)100周年記念晩餐会がロンドンで開催され、横氏と松方氏が招待された。松方先輩のAC100周年についてのお話を、感激して聞いたことが今でも忘れず憶えている。

伝統ある英国山岳会

今から150年前の1857年11月6日、バーミンガム郊外のウイリアム・マシウズ家に、アルプス登山経験者28名が集まり、英国山岳会が創立された。その名は、The Alpine Clubである。即ち世界最初の山岳会であるが故に、ACと呼ばれるのである。明治維新が、

1867年であるから、その10年前に英国山岳会が創立したことになる。

初期の会員281名のうちで、昔からの貴族出身者は3名であった。クラブの社会的構成は、主として中流から上流階級からなっていた。新会員の大部分は都市居住者であった。19世紀後半における産業の急速な発展によって、都市は産業革命の煤煙に汚染されていた。このような環境で、会員は登山を通して精神的な価値と自然美の再発見があったといわれている。

1957年、英国山岳会100周年の会長は、1953年エヴェレスト隊の隊長ジョン・ハントであった。タキシードに白タイの正装のハント会長に、略装に黒タイの日本からの2人は迎えられた。ハント会長の挨拶のなかで、遠い日本から参列した横氏と松方氏に特別の歓迎と感謝の言葉が述べられた。AC会員の他に20数カ国の山岳会代表も参列していた。ハント会長の客として、テンジン・ノルゲイの顔もあった。総数400名に及ぶ男性ばかりの会で賑やかであった。松方先輩の印象に残ったことは、ヒマラヤのバイオニ

アの一人である長老、トム・ロングスタッフ(当時82歳)がAC創立50周年記念に出席し、AC会長も務め、今回100周年にも元気に出席していることであった。彼は、横氏と松方氏には特別に親切に話かけてくれた。ロングスタッフのAC入会の推薦者は、日本でお馴染みのウェストン師であることがおもしろい。

もう一人は、『カナディアン・ロッキー・マウンテンガイドブック』の著者ソリントンに会ったことである。ソリントンは、当時カナディアン・ロッキーの未踏峰として残されていたマウント・アルバータをガイドブックで世界に紹介した。

1925年、日本隊がマウント・アルバータを目指したのは、そもそもソリントンのガイドブックで初めてその山容に接し、その難関を克服する気持ちになったという経緯がある。横氏に話しかけてきて、「ガイドブックにマウント・アルバータを紹介してしまったことが、今でも残念に思っています」と言って、アルバータ登頂を祝福してくれたことも愉快であった。またこの会で横氏は、アメリカ

山岳会オバリン会長(1948年アルバータ第二登頂者)と初めて会い、堅い握手を交わした。さらに横氏は、帰路30年ぶりにスイスに立ち寄り、ブラバンツ氏をはじめとするスイスの友人に会い、歓迎された。

サロン登山家として

50年の時が過ぎ、私を含め多くの会員がサロン登山家となった。最も活躍している会員は60代と言われている。時代の変化を感じる。

英国山岳会は昨年11月、創立150周年を迎えた。6月22日から24日、ツエルマットで開催された150周年記念行事に『ジャパニーズ・アルパイン・ニュース』編集長、『チベットのアルプス』の著者、中村保会員夫妻が招待された。中村会員の報告によると、世界的に登山活動が減退傾向のなかで、アングロサクソン民族系の国々の登山活動は衰退していないとのことである。

これからの日本山岳会は、国際交流をより活発にして、新しい登山活動を誕生させたいと、永年会員になった今、つくづく感じる今日このごろである。

委員会紹介

インターネット小委員会

1997年に発足し、以後日本山岳会ホームページ(JAC、HP)を運用している。現在、本会および山岳関係の情報掲載と、会員への連絡や意見交換等の掲示板、ルームや山研の予約を掲載する会員サービスを提供している。

2007年より、メールマガジンで各種イベント情報などをタイムリーに配信。07年後半からサーバの容量を大幅に増加し、HP内容の向上を目指している。以下、HPの利用状況、利用方法、および今後の運用課題を紹介する。

利用状況

HPへは1カ月に平均9000件のアクセスがある。会員専用ページの閲覧登録者は08年2月現在、700名弱である。これは会員数の1割前後であり、一層の利用増加を図っていきたい。

ホームページの構成

記事は、資料と広報に大別され、広報記事は組織、規約等の紹介と登山にかかわるイベント等のニュースに整理され、TOPページか

ら系統的に閲覧出来る。以下に図(9ページ参照)を掲載し、構成と概要を説明する。

TOPページ

HPの総目次である。中央の写真は1カ月ごとに順次各支部推薦の山の写真を掲載している。その他、新着情報、山研の利用状況、会員ページ(5つの中項目)をタイトルで案内・紹介記事と資料が掲載されている。また、ルームへの地図と英語ページへのリンク先がある。次にそれぞれの詳細を記す。

(1) 新着情報

各委員会、支部、同好会開催のイベントや会員の重要な成果報告紹介等の記事にリンクするヘッドラインである。

(2) 会員ページ

ルーム予約、掲示板(投稿欄への書き込みと閲覧)、メールマガジンのバックナンバー、山岳保険Q&A、蔵書リストなど。JACの諸規程、HPへの記事掲載方法等が閲覧出来る。ルーム予約は、事務局の予約表に記入された予定を数

日間隔で更新・掲載している。

今後は、JACの事務関係のダウンロード可能な記入書式を掲載する計画である。

なお、会員専用ページは、パスワードを入力して利用する。パスワードの取得方法は、会員ページにアクセスして、パスワードをもらう。メルिटとして①会員専用のHPが閲覧できる、②メールマガジン「日本山岳会だより」が配布される。

(3) 各中項目について

●日本山岳会について
定款、歴史、役員、事業報告、収支、入会方法等の記事である。

●活動案内

日本山岳会の最新ニュースを掲載。JAC主催の企画や活動の紹介と報告、および会報『山』の巻頭記事が掲載されている。

●資料室

JAC出版物、山岳関係の図書紹介、過去の主要なJAC遠征記録、日本人の8000メートル峰登頂者リスト、中央分水嶺踏査記録、『山』総目録などが閲覧資料化されている。

サーバ容量が増大したので今後山岳関係のデータベースとしての

充実を進める。

●各組織の活動

委員会、支部、同好会の活動を紹介するHPのリンク先リストである。これらのHPには、それぞれで作成したもの、当委員会受託作成したものがある。掲載方法の詳細は、前述の会員ページに記載されている。

●山のお知らせ

登山界のニュースを主としている。JAC主催以外の山岳関連の大きなイベント、成果や報告などを紹介している。

●メールマガジンについて

HP記事の更新や新着ニュースなどを、会員ページパスワード申請者に随時メールマガジンで通知している。

最後に

今後、社会の電子情報化が加速しJACのHPの重要性が増す。各支部、委員会との連携を強化して公益活動並びに会員サービスを支えていきたい。

会員活動のイベント予定、活動成果等の情報などをHPで紹介したいので、当委員会へ積極的な情報提供をお願いする次第である。

(多田真弘)

日本山岳会のホームページ

<http://www.jac.or.jp>

●トップページ

●新着情報
掲載情報の一覧表示

●支部の山
毎月、各支部が
提供する自慢の山、
とおきの山を紹介

●山研の利用状況

●英語版

ホームページ
に関する
問い合わせ
(インターネット小委員会)
jac-room@jac.or.jp

会員専用ページ

●ルームの利用状況

●掲示板

●メールマガジンのバックナンバー

●山岳保険Q&Aなど

●蔵書リスト

●日本山岳会について



定款
日本山岳会の歩み
歴代会長
役員一覧
事業報告
収支計算書
ほか

●各組織の活動



委員会の活動
支部の活動
同好会の活動

●活動案内



日本山岳会のニュース
会報「山」論文
行事予定

●山のお知らせ



登山界のニュース

●資料室



図書紹介
出版物
山の新刊書
遠征記録
中央分水嶺踏査記録
「山」総目録
8000m登頂の日本人リスト
リンク
ほか

●各委員会のHP



●各支部のHP



●各同好会のHP



* ホームページには会内外の有益な情報が掲載されており、逐次更新されています。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

学生部指導委員会

日中韓三国学生交流登山

2月22日から26日までの5日間、北アルプス・梅池高原を中心に中国・韓国・日本の学生による交流登山を行った。大雪に見舞われ、当初予定していた計画の半分しかこなせなかったが、日本の深い雪のなかで交流を深め、充実した日々を送ることができた。

21日、中国から幹部を含め10名、韓国からは13名が来日した。中国は北京の中国地質大学から、高所登山、クライミング、読図など、各部門に特化した学生が、また韓国からは8大学の、岩登り、アイスクライミングを中心に活動している学生で、この交流登山のためソウル郊外で2回ほどスキー合宿を行ってきたという気合いの入れようである。日本からは、1年生を中心に10大学12名の学生が参

加した。

22日、全員がバスで出発。中央高速道から見える富士山に感動しつつ昼過ぎに梅池に到着して入山準備をする。晴れていた。

北アルプスの山々を展望しながら早大神の田圃ヒュッテに入る。ここからは通訳もない。学生だけですべてをこなしていく。英語もままならないことから、はじめはぎこちなさも感じていたが、当番を割りふり、協力して食事を作るなどするうちにうち解けていった。「山登り」という共通の目的があるからこそだと感じた。

23日から山腹の梅池スキー場で練習を始める。韓国のスキー場はすべて人工雪だそうで、日本の雪は柔らかいと喜んでいて、レベルごとに2つのグループに分かれて練習した。午後になり天候が大きく崩れた。ヒュッテに帰ろうとしたが28名の学生がまとまって動く



「山登り」という共通の目的から交流を深められた三国の学生

には時間がかかり、帰る途中に雪崩の危険もあるため登り返すのをやめて民宿に泊まった。

翌24日も天候が荒れていることからゲレンデでのスキー練習。

25日、一時的にだが天候が回復した。皆でヒュッテへ上がって個人装備などの荷物を下ろした。26日の好天はまったく期待できず、残念ながら登山のチャンスは巡ってこなかった。そして帰京。

白馬乗鞍岳に三国の学生が力を合わせて登る、という当初の目標が達成できなかったのは残念で仕方がない。せっかく来てくれたのにとと思う。しかし大雪のなか、ス

キーの経験がほとんどなかった彼ら彼女らの上達には目を見張るものがあつた。ぜひまた日本の深い雪を経験しに来てほしいと思う。私たちは、よく滑り、よく転び、時にお酒を飲み、たくさん笑った。言葉ではなく、「山登り」という共通の目的を通じてコミュニケーションした。

山登りは私たちにたくさんの素敵な出会いを与えてくれるが、今回の交流登山は、そんな山の魅力をもさらに感じる事が出来たと思つている。協力して共に作り上げるこの日中韓の交流登山を今後どう繋げていくか。今回参加したすべての学生が考えていかななくてはいけないことだと思う。次世代を担う今回のメンバーが経験を引き継ぎ、交流登山がより有意義なものになるように望んでいる。

27日は、さよならパーティ。「楽しかった」「次は韓国で岩登りを」「高所登山の中国へもどうぞ」の言葉が聞かれた。

このような有意義な機会を下さつた山岳会の皆さまに感謝致します。どうもありがとうございました。シュエシュエ！カムサハムニダ！

【交流登山参加者】

中国Ⅱ 顔金安・登山協会副主席、李成祥、趙建軍・海外担当幹部、(以下、中国地質大学) 楊絳梅・体育教師、梁彥強、溫旭、薛科展、曹陵、元冉冉、儲夫祥

韓国Ⅱ 邊裕根・山岳会副会長、冨東植・総務理事、鄭準模海外担当理事、金鈴奎・広報担当、金晟圭(ソウル大OB)、鄭在鎬(ソウル大)、金胤伶(ソウル大)、李東圓(漢陽)、尹海源(龍仁)、孫志英(東國)、李宰圭(慶北)、金秀珪(梨花女)、金志炫(漢陽)

日本Ⅱ 神崎副会長、吉永・宮崎・成川常務理事、小山さやか(立教)、原川聖史(上智)、藏本悠介(中央)、野邊慎吏(早稲田)、松本透(早稲田)、鈴木大地(法政)、畑内進(法政)、秋葉雄太(東京理科)、設楽琢磨(日本)、戴義(学習院)、酒井遼(千葉)、加藤好美(専修)

登山コーチⅡ 黒田誠、スキークー

チ・松沢節夫、村松哲彦

図書委員会

第25回図書交換会開催

ルームへ向かう道の脇の紅梅に



図書の閲覧に熱心な当日の参加者

春の気配を感じる3月1日、昨年に続き、本年も図書交換会が開催された。

集会室に並んだ本は和書194点、洋書20点の計214点。開始時間の2時間前から会員が集まりだし、みな熱心に本を手にとっている。

そして、いよいよ開始時間。幕を開けてみると、当日の参加者に加えて、事前に郵便やメールで申し込んだ会員の分も含めると、ほとんどの本が抽選になった。

単純なくじ引きに、ため息がもれたり歓声があがったり、ちよつと大人げないが、この楽しさこそ

が図書交換会の醍醐味だ。ちなみに不参加者のくじは図書委員が代理で引いた。

倍率が一番高かったのは『安曇野の蝶』(田淵行男著)。著者の署名があることで、17倍の倍率になった。

また、入札本の『新西域記』(大谷家蔵版)は上・下2巻の大型本で、こちらも大谷光瑞の署名がある。全員が興味津々に見守るなか、15万1千円の落札価格が発表されると、参加者から大きな拍手が湧き起こった。

最終的には11点を残し、ほとんどの本が新しい持ち主を得ることができたのは何よりだった。出品者の協力で、本を安価で提供できたことを感謝している。

思わぬプレゼントもあった。昨年に続いて本年も多くの本を申し込んでいただいた三島市の長田義則会員から、みかん1箱が図書交換会あてに届いたことだ。熱気で渴ききった参加者の喉を潤した、そのみかんの瑞々しさは格別だった。復活して2年目の図書交換会は、各地の支部に多くの「おなじみさん」を得ることができ、それが大きな財産となっている。

図書交換会を通じて、各地の「本好き」会員に出会うことができたのは、私たち図書委員会にとって大きな幸이었다。(三好まき子)

資料映像委員会

DVD配布の報告

会報「山」1月号に、講演会DVDの完成報告と支部への無料配布についてお知らせをしました。

結果、24支部から希望があり、実費での配布希望を含め56セット(1セット5枚)の配布となりました。

3月17日に発送作業を終えました。資料映像委員会ではこのDVD配布を機に、支部からの忌憚のない声を届けていただくことを希望しています。

また、皇太子殿下にご高覧いただくことになり、羽田委員長がお届けいたしました。

山岳文化の継承を担う委員会として引き続き活動を進めていく所存です。今後変わらぬご指導、ご意見、ご教示などよろしく願います。

紙面を借りてご報告とお礼を申し上げます。

(奈良千佐子)

N — 東 西 北 — — 南 北 — S

スキーの原点へ

松家 晋

わが国にスキーが伝えられてやがて100年になる。

スカンジナビア地方やアルプスの山麓で初めは雪上を歩く用具として発達してきたスキーが、近年登山の勃興期に、積雪期登山という新たな分野で果たしたその役割は大きなものであった。

スキーの発達はスポーツとしての側面から、競技スキーとして大きな発展を遂げる一方、雪上の滑降を楽しむ遊技として広く大衆の間に普及していった。なかでも太平洋戦争後は、スキー人口の増加とともにスキー場にリフトやゴンドラが付設され、スキーが冬期における一大レジャーとしての位置を占めるまでになった。その結果、

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

スキーヤーは整備されたゲレンデ内で滑降を楽しむのが主となり、スキーで山に登り山を越えるような事例は極めて少なくなっていました。

日本の一部の山々では残雪期を含めると約半年は雪に覆われている。無雪期に樹林やブッシュで登れない山々も、積雪期にスキーを使えば登りやすいのである。私は山岳を愛する人々はゲレンデを脱け出し、スキーを履いて山野を跋涉する喜びを味わうべきだと思う。それは清浄な中で受ける大自然の印象は一層強いし、また思いがけない創造的な感動を与えてくれるからである。戦前は八甲田にしろ、吾妻連峰や信越の山々にしろ、山そのものがスキーの道場であった。幸いにも日本山岳会には伝統を受け継ぐ山スキーの同好会「アルパインスキークラブ」(1990年設立)がある。各地で山スキーを



充実した内容の「雪上散歩」

楽しみ、研究を続けている熱心なグループである。その活動記録を綴った年報『雪上散歩』の最近号を目にしたが、どの山行報告からも山スキーのオリジナルな楽しさと喜びが伝わってくる。また、山やスキーについての先人の特集記事など、他では得がたい参考記事が多い。

「アルパインスキークラブ」には、安全で楽しく山スキーに親しめるよう、まず指導者やリーダーの育成を図られることを望みたい。その結果、山スキーを履いて、山や森へ入っていく人たちの底辺が広がっていけば、山登りもまた一層おもしろいものになるだろう。

ヒラリーと画家の清野さん

成川 隆顕

エヴェレスト初登頂者のヒラリーさんが08年1月11日、亡くなった。

ヒラリーさんの訃報を聞いてすぐ思い出したのは洋画家の清野恒さんのことである。日本山岳会の会員で50歳代の半ばを過ぎてからヒマラヤ通いをはじめ、山とそこに暮らす人々を、尽きぬ興味と愛情をこめて描いた。色彩豊かで、ダイナミックなタッチだった。

清野さんがヒラリーさんと出会ったのは1966年。エヴェレスト山麓に病院の建設資材を運んでいたチャーター機に便乗させてもらったのが縁だった。彼はヒマラヤ財団を作り、学校や病院を建てていた。シェルパ族の住民たちに尽くす姿に心を打たれ、親交を重ねた。清野さんが9歳年上だった。ヒラリーさんに不幸が見舞った。1975年3月、ネパールに永住しようとかトマンズに着いた夫人とお嬢さんが、飛行機事故で亡くなったのだ。

清野さん5回目のヒマラヤ行はその1カ月後だった。ナムチェ・パザールからタンポチエへ向かう途中ではったり彼と出会った。再会は言葉にならず、ただ抱き合っ

て涙を流したという。ヒマラヤ財団の運営は苦しかった。そのうえに失意が重なった。



来週 ヒラリーさんと清野さんの友情を伝える当時の新聞記事

善意を現金のドルに換え(当時は《送金》が難しかった) 清野さんはその年の暮れ、カンパに応じた人たちのリストと、子どもたちに贈る抱えきれないほどの文房具を携えてネパールへ旅立った。同行した次女の緑さんはそのときのことをよく覚えていた。

た。清野さんは日本での募金を考えた。励ましの気持ちを伝えたかった。JACの有志と図って「ヒラリーを励ます会」をつくり、募金の輪を広げた。いま、私の手許に残っている募金趣意書に、今西錦司会長、佐藤テルさん、日ネ協会の日高信六郎会長、西堀栄三郎副会長らの名前がある。数カ月で111万円が集まった。

マナーある宿泊を

白木博信

大晦日から新年3日まで山研に滞在したおりに、考えさせられたことがあった。それは一部宿泊者のマナーについてであり、会員の皆さんにも考えていただきたく、投稿した次第である。

まず、山研委員の方々の献身的、犠牲的の尽力に感謝申しあげたい。聞けば、29日早朝よりの食料の買い出しや荷揚げなどご苦労があった。特に荷揚げには大変な労働を課したようだ。それは、温度の上昇により雪道が解け始め車がスリッパし、山研まで入れなくなった。そのため釜トンネルから人力で担ぎあげ、夜遅くまでかかり諸作業を完了されたということだ。その

他、建物内・外の整備、仮設トイレの準備など大変な労働となった。献身的かつ犠牲的なご尽力に感謝したい。

31日、17時過ぎより始まった越年の食事会では、ここまで用意していただいたのかという豪華なメニューに感心し、恐縮の至りであった。和気あいあいとした楽しい食事であった。しかし残念なことに一部の同好会会員が酒量をわきまえず飲み過ぎたようで、騒ぎ出した。他の宿泊者の迷惑を考えることなく、その騒ぎは続いた。さらに寝室に入ってから放吟は止まなかった。注意されると聞き直して絡んでくる。その乱行振りはみにくく、恥ずべきものであった。同じ会員として情けなく悲しくさえ感じた。

21時頃より始める予定であった「ゆく年くる年パーティ」はオードブルと年越しそばが用意されていたが、委員の判断で中止となった。前述のような状態のなか荷揚げしていただいていたのに申し訳ない思いがした。

昨年の会報『山』に「日本山岳会への提言」が連載された。12月(751)号では、平山前会長が

日本山岳会が目指すべきものとして「伝統と品格」について言及されていた。そのなかで創立された発起人の方々ははじめ、諸先輩の高尚な理想や、育んでこられた登山文化について触れておられた。ご乱交の会員諸君は、日ごろの山行でもこのような状態なのではないかと想像してしまう。JAC会員の品性とレベルが甚間云々されているのではと危惧するものである。

みな中高年以上の会員であり「人間の経年変化は人格の向上」と心得るべきではありませんか。

青海チベット鉄道とカイルス内院展望ハイキング16日間
5/20発 ¥685,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

山旅人の日記

カトマンドウでのこと

上野幸人

26日から待望の雨が降ってきた。幾分涼しい。昨日、1日中歩いたせいか右足の先が痛い。どうやら靴が合わないらしいが、トレッキングには支障なさそう。サンセットビューで朝食をとりながら記録を整理し葉書を書いていたら、広島の小島正雄さんをアルジュンさんから紹介される。22歳の時に被爆された方である。メタセコイアの木を持ってネパールへ植林に來ているという。

メタセコイアは、中国で発見された奇跡の木といわれている。現在の石炭・石油の元になっており、かつて世界中に生息していたそう。戦後、アメリカが中国からカリフォルニアに持って帰り植林をしたところ成功し、現在、地球を守る木といわれている。

小島さんは「二葉山を守る会」を主催しているほか「広島を語る会(被爆経験者)」にも参加している。小島さんは爆心地から1・5

キ 離れた家のトイレで被害にあった。暗い瓦礫の中で「助けてください。助けてください。必す世の中のためになることをやります」と神様に祈っていたそう。すると、一条の光が差し込み、光を頼りに這い上がり助かったのだという。その後、いつしか当時のことを忘れてしまっていた。ある日、ふとしたことをきっかけに二葉山に犬を連れて行き、落ちていたゴミを拾ったとき原爆で死にかけたことを思い出した。そして、これなら私でもできると思い、ゴミを拾い始めたのだそう。それから17年経ったある時、山の不思議な夢を見たそう。その夢がどうにも気になり、それまで行ったこともない山の裏側に行ってみた。そこには、開発により崩された山の姿があった。そして、大きな木が「助けてくれ!」と叫んだような気がしたそう。このことを九州の友人に話すと「その山に行ってみよう。連れてってくれ!」となり、共に「二葉山を守る会」を立ち上げたそう。

高齢にもかかわらず前向きに生きている姿に感動する。つい昼近くまで話し込んでしまう。私が、

「谷川岳で遭難して助けていたのだのに何も感じない。私は何もしていない。お恥ずかしい」と話した。すると、「今日、感動した事を話すだけでいい。拘束するものはない。感動したことを人に伝えることが大事ですよ」と言われた。とても素晴らしい人である。いつの日か機会があれば誰かに伝えようと思う。

1993年4月28日記

*

日記帳を整理していたら付箋が付いていたので開いてみた。あの日記の日から15年が経った……。

今、私がしていることは、体験し感動したことを「伝える」こと。偶然ではあるが、小島さんの「落ちていたゴミ拾い」と同じような気がする。

皆さんも感動したことを誰かに伝えてみませんか。

愛惜——北の大地の岳徒

石岡慎介

京都支部の斉藤惇生氏から頂いた「北アルプス大日岳の事故と事件」で学生2名の雪庇崩落死事故

を拝読していた時、メディアが北海道十勝岳連峰・上ホロカメットク山(1920メートル)の雪崩事故を報じた。表面の雪の層が古い層からズレ落ちる表層雪崩は、幅20メートル、長さ50メートルとか、現場の通称「ばけもの岩」の北斜面で発生し、北海道支部の11人にいきなり襲いかかったようである。

07年11月23日、耳目を疑う最悪の結果と直感したが、支部岳友を4名失い、1名重症の報道に接し、テレビと新聞紙上の情報のみ追った。遭難の方には北海道分水嶺踏査でお世話になり、美瑛岳頂上で抱き合った岳友もいた。

「天気が気になるけど、気をつけていってくるよ!」の言葉を娘さんに残し出かけた父、「子供も手を離れ、2人の山人生が始まるところだった……」と愛妻を失った夫の肉声を目にすると痛切である。

紙上だけで状況把握に努めたが、ポイントを要約すると次のようになる。

①「遭難現場は数日前より大雪状態であった。雪崩が西側斜面で発生していた」(毎日新聞)。②「ざらめ状の弱層」が崩れ、その上の「ハードスラブ」が流れ落ち危

険状態にあった」(日本雪氷学会北海道支部)。(3)「前日に発生したらしい雪崩堆積を確認したが、尾根末端であったので大丈夫だと油断し進んだ」(リーダー記者会見)。

④「雪に埋もれた場合、位置を発信させるビーコン装備を4人しか持っていなかったのは失敗だった」(リーダー会見)。(5)「雪崩多発の山として知られ、過去11月下旬の1988年女性1人遭難、1994年男性2人犠牲になった」

(北海道新聞)などである。気になる情報として仄聞したのは、⑥「雪崩に別パーティの1人が巻き込まれていた。雪崩と一緒に落ちてきたのである。支部仲間を救出しようとして掘ったら出てきた」というものである。事後調査によれば「約400メートル上部を歩いていた2人パーティの1人が、雪崩に巻き込まれ落下してきた」という話もあった。

現地へ入ると、分水嶺山行の支部会員は次のように語っていた。「雪崩の多発地帯である事はわかってはいたが、過去5回の定例の雪上訓練は無事故で通し、恵まれていたのだが……」

12月8日の合同慰霊祭は、「いつ

までも悲しみの淵を歩き続けている訳にはいかない」と、けじめの日「のようなご挨拶から始まった。かけがえない仲間を失ったリーダーは悄然としつつ、勇気を持って事実を洗い出し、6回目となる基礎訓練が実績に基づく計画であったことにまず触れ、次のように述べた。「出発前は雪崩堆積物(デブリ)の存在は確認していた。1420メートルの高度で進行中、右稜線の東から西へ直下の沢に雪崩が起きた。最後尾のリーダーを含め全11名の埋没と自力脱出の苦闘ぶり。蘇生への試みなど」が生々しく報告された。搜索活動は警察の管理下に入り、事故翌日の会見になっていたのであった。

日本山岳会や北海道山岳連盟の首脳は「全国の仲間が応援し見守っているのを、志を継いで安全で楽しい登山に力強く踏み出してほしい!」と、無念の極みのなかにも激励する気持ちが表われていた。しかしながら、「慢心、油断」がなかったのかという反省と責任の重さを、組織として支部活動として問う言葉も聞かれた。主力メンバーが遭遇した事故でもあり、救出体制の遅れ、支部の活動基盤の

総点検などが提起された。

北海道支部は、中央分水嶺踏査でも指導的役割を果たされ、小中学生の自然児学校、高山植物バトリール隊、本格化してくるオホーツク分水嶺踏査の林道調査などの活動がアピールされていたが、あまりにむごい現実から、ご遺族の心境に胸が痛んだ。

不帰の岳友に対して、前支部長は声を限りに語りかけた。

「山仲間は血のつながり以上であって、いまだ友の霊がさまよっている現場で、何ができるのか一緒に考えようではないか!」と……。失われた信用の回復には10年かかるだろうとも述べられたが、ゆえなきことではないであろう。

各テーブルをまわりながら、会員・会友の言葉にジッと耳を傾けるリーダー。JACに入会して「山へ入れば、メシといのちは自分持ち」という規範は学んだ。「人に登らせてもらった訳ではなく、ご自身で考えて登っておられるなら、これ以上悩まされたいと貴方が壊れてしまうので気を強く持つて下さい」と声かけるのが精一杯であった。

俳句

赤沢鉦泉にて

西山秀夫

ハケ岳鉦泉宿の柚子湯かな
寄せ鍋や湯気に幸あるごとし
美しきソプラノを聴く雪の宿
湯たんぽや手に取ればつく里心
登山者を黙して待つや雪達磨

元旦

去年も書き今年も書くや山の本

野沢温泉スキー懇親会

各地より集ふ友ありスキー宿
シニールの行きかふ冬の木立かな
スキー靴のまま見しスキー博物館
一時の傍きブナの樹氷見る

車でめぐる東チベットと、世界最高所の青蔵鉄道

ナムチャバルワと聖なる湖・
東ヒマラヤ大周遊と青蔵鉄道10日間

発着地 東京・大阪・名古屋・福岡

4/23(水)～5/2(金)……………¥528,000



国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 © 日本保証会
ALPINE TOUR サービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

書評・『山岳』第百二年を讀む

充実していた登攀記録

『山岳』第百二年、例年になく分厚い充実した内容である。巻頭に「冬季ローツェ南壁完登」が、「東海大学K2登山隊二〇〇六」とともに掲載されている。ここ何年にも『山岳』の内容は、日本山岳会百周年ということもあつてか、歴史的記事が大部分であつたが、今回は冒頭に海外からも注目される登攀記録が報告されているのは嬉しいことである。

ローツェ南壁は世界第4位の高峰ローツェ(8516^{メートル})の山頂すぐ近くの稜線に直接突き上げる標高差3300^{メートル}の巨大岩壁で、ヒマラヤの名だたる難ルートであるが、東海支部は冬季の初登頂を目指して3回目の挑戦で成功した。これは日本山岳会の支部としての記録であることに加え、私に関心をもったことは、完登した隊長の田辺治氏は45歳、00年と03年に続く3度目の挑戦で成功したことである。

東海大学のK2は、大学山岳部としてシェルパ・レスでの登頂であることに意義があり、また登高

中のトラブルを乗り越えて、登頂

した小松由佳リダーは自らトップにたつてルートを拓き、日本人の女性としてK2初登頂である。

これらの報告に続き、「日本列島中央分水嶺五〇〇〇^{メートル}踏査の記録」の報告がある。これは科学委員会の提案により、百周年記念事業として実施され、全国の支部に首都圏の多数の同好会が参加して行なわれた。全国の支部がひとつの目的を完遂するために分担して登山を行なうことは、今後もないのではないかと思われる。百周年に相応しい企画であつた。

さらに児玉茂氏の百周年外史とも言うべき記事と日本人の海外登山リストが目をひく。これをベースとして、明治、大正、戦前の昭和の日本人の同行者も含め、登山の時期なども加えた海外登山記録集の編集が望まれる。

次に五十嶋一晃氏の「関西学生山岳連盟六十余年の活動」がある。五十嶋氏は、関西学連とは関係のない方であるが、多くの文献からまとめたもので、今日の時点で多くの示唆に富む内容であつた。

私は、会報の役割は全国5000人の会員とのコミュニケーションのためにあると考えている。従つて委員会の活動、集会の記事の他に、多種類の記事、たとえば同好会、同期会などの行事も数行でよいから載せてはどうだろうか。会員の高齢化が問題であるのに、学生部の活動の記事が見当たらないのはどういふわけであろうか。

これに対して『山岳』は日本山岳会の年報であり、海外でも世界の山岳会の代表的機関紙とみなされているようである。『The Himalayan Journal』の2004年号は、世界の3つの山岳会報をとりあげ、『The Alpine Journal』『The American Alpine Journal』と並んで『SANGAKU』を南川氏が執筆している。

『The Alpine Journal』は毎号、最初は地域別の記録が多数記載され、その後に芸術、文学、歴史、科学の記事がある。『The American Alpine Journal』は表紙に『The World's Most Significant Climbs』と記している。私は、『山岳』は今回のように日本を代表する機関紙として、今後も冒頭を飾る登攀記録が掲載される事を期待したい。

その場合あえて言うならば、日本山岳会の会員に限定しなくてもよいと考える。

最後に今回の『山岳』の編集者がかなり代わられたようであるが、長い間編集に従事していただいた方々に感謝を申しあげます。

(大島輝夫)

百年史の補遺としても力作

『山岳』第百二年を受け取つて、まずそのボリュームに驚いた。

書籍重量780^{グラム}は過去最高である。これに次ぐものは、望月達夫さんが編集された第六十二年の730^{グラム}であるから、おそらく今後これを凌駕するものは出ないと思う。本文477^{ページ}。巻末の英文梗概、記録、報告、シンポジウム、図書目録、広告等が83^{ページ}もあり、極めて浩瀚。「山高きが故に尊からず」と言うが、本の価値がページ数や重さで決まるものではないことは言うまでもない。今回は日本山岳会百年史の補遺とも言える記録や論文が、本文の半数を占めている。丹念に資料を纏められた執筆者のご努力に敬意を表したい。いま会員の平均年齢は66歳と高齢化しているが、既に80歳をこえ

た私にとって、小さな活字を読み取ることは至難の業である。『山岳』は、会報報告、図表類、図書目録など細字の部分が多く通読困難である。

この頃は年齢のせい、か、人事とは思えず念入りに読むのは追悼欄である。永年在籍した会員の訃報が多いのは当然だが、それだけに山岳会の歴史の隠れた側面が表われることもある。貴重な誌面を占めることに意見もあるようだが続けてもらいたいと思っている。岳沢ヒュッテの上條岳人さんが交通事故で亡くなられたのは意外であった。昭和29年夏、第9回北海道

国体の時、往路の青函連絡船のデッキで明け方まで山を語り合った。その後何度か上高地に誘われたがこの時が最初で最後の出会いとなった。100歳を超えて昇天された静岡の牧野衛さんとは、1978年の秋に、後にそろって名誉会員になられた望月達夫さん、奥野正亥さんの3人で九州の山を歩いたことがある。

『山岳』第百二年の文中で、私にとってのハイライトは「日本の記録」である。支部会員40名、全国最小の熊本支部にとって、中央分

水嶺踏査は総力を挙げて取り組んだ大事業だった。04年10月に全国支部懇談会の熊本開催を控えて、支部長はじめ支部役員は準備に忙殺されていた。止むを得ず老齡の私が企画、実施の総括責任者となり実施に踏み切った。結果的には1年8カ月をかけて総延長180^{*}を延べ189名で完歩することができた。

今回の『山岳』第百二年で最も印象に残ったのは、巻頭の二葉の写真(冬期ローツェ南壁完登)だった。東海支部の執念と底力に敬服する。

(本田誠也)

登攀記録に読み応え

私は一九八〇年、日本山岳会学生部登山隊参加がきっかけで入会し、28年間、『山岳』を受け取り続けていた。海外登山が主たる目的であった私にとって、市販の山岳雑誌で最新の登山ニュースを得るため、年一回の『山岳』記事は写真が少なく、正直あまり興味の無い対象であった。記事内容も硬い印象が多く、目次を確認し本文を斜め読みし書棚に収まる、という状況であった。

現役クライマーを離れて久しい

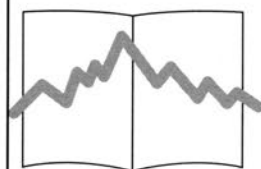
私ではあるが、最新号の『山岳』第百二年を読み、その感想を述べてみたい。まず巻頭の二編、田辺治氏の「冬期ローツェ南壁完登」、出利葉義次氏の「東海大学K2登山隊二〇〇六」の両隊長による海外登山記録は、要点がコンパクトにまとめられ、カラー写真と共に登山隊の核心部がよく書かれている。横山勝丘氏のアラスカからボリビヤへ若手四人が挑んだ最先端の登山、および氷熊氏のカナダ極北クライミング、有村氏のペルーアンデスと一ノ倉記事は、内容が濃く十分な読み応えがあった。従来、海外登山記事はレポート風な内容で面白味に欠ける事が多いが、今回はそれぞれの登山に賭けた真意がよく伝わってきた。

児玉茂氏の「アイガー東山稜から百周年まで」と「日本人の海外登山・リスト」は丹念に過去の資料を探り、当時の会員達の発言からその内実を取り出して、日本山岳会と日本人の間違った登山を水平軸、垂直軸、時間軸でまとめ、網羅した集大成である。五十嶋一晃氏の「関西学生山岳連盟六十余年の活動」はこの児玉氏の記事とリンクし関西地域の活動がよくわ

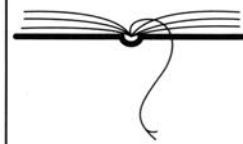
かった。この児玉氏の記事を含め、今号の『山岳』に掲載されている百年史関連の「日本山岳会図書室の歴史」、「日本山岳会財務状況の推移」は、本来なら百年史そのものに入れ出版されるべきものであると考える。江本嘉伸氏が述べておられる百年史は「苦渋の労作」で、編集に携った方々のご苦労は理解するが、これらが百年史に収められなかった事が残念であった。「日本列島中央分水嶺五〇〇〇^{*}踏査の記録」は全ルートの75^{*}は登山道無しという困難、今風百名山ピークハンターとの対極をなし、地道ではあるが福山美知子氏の述べる詩情を誘うロマンを抱きながらかつ開拓者魂の高揚を感じ、会員達が連携し達成させた大記録は、価値あるものである。

疑問に思うことは「シンポジウム 高所登山における突然死を考える」、「大日岳の積雪地形研究」。「70年エベレスト南西壁登攀の記録について」の記事はなぜページ数の捻りが逆なのだろうか？ 英文は別として日本語横書き原稿はこのような編集になるのであろうか。読む方向が左右混在のため少々読みにくかった。

(坂井広志)



図書紹介



『風の記憶——ヒマラヤの谷に生きる人々』

貞兼綾子・著



2007年9月
春秋社刊 270頁
四六判 定価 2940円

な旅を1970年代からずっと続けている。

1章でネパールヒマラヤの東部について述べ、以降、2章から4章でそれぞれ中央部、中西部、極西部について触れている。これは、おのの自然条件をもった土地で、チベット仏教も独自の歩み方をしたという貞兼さんの持論によるものだ。すなわち彼女は、カリガンダキを境に、モンスーンの影響を受ける湿潤な東部と影響の少ない中西部では、植生などの自然環境も景色も大きく異なるという、その自然条件によって宗教の色分けができたのではないかと述べている。

「チベット高原の南西部を東西に弓なりに縁取るヒマラヤの山脈、その山麓一枚一枚に大小さまざまな谷があり、それぞれの谷に固有の生活習慣や言語をもつ人びとの暮らしがある」。世界は、なんと豊かなのだろう。本書は、この山麓をひとつひとつ歩き、人と出会い、彼らの暮らしや歴史、宗教、文化と出会った話。著者の貞兼綾子さんは、ときには民家の軒先に泊めてもらい、あるときはチベット人を装って旅をした。しかも、そんな

そして序章では、歴史的キーパーソンとしてパドマサンバヴァとミラレーバを取り上げている。パドマサンバヴァは東部や中央部で活躍したニンマ派であり、ミラレーバは中西部を活動の場としたカ

ギユ派の僧である。ふたりがまるで時空を越えて本のなかに舞い降りてきたような、躍動感のある描写だ。

また、ヒマラヤの旅のヒントもたくさんある。コースガイドではない。例えば「私の旅の起点はいつも南からだ」とある。ヒマラヤの谷を北上するのが彼女のスタイル。山も同様。どこからアプローチするか、実際はガイドの手配や交通手段などによって限られてくるけれど、かの地のように政治的歴史的に複雑であれば、それが旅や登山の色合いを決めるものにならないだろうか。

もうひとつは、山名について。峰々すべてに名称があるのではなく、神が宿るものにのみ名前が与えられている。だから、山の名前が知りたければ、その地に住む人に「この頂はどなたの座す場所ですか?」と問うべきと貞兼さんはいふ。神の宿らない山であれば、カンチェン(大雪山)など気ままな回答になるが、明瞭な名前があれば、それは彼らにとって土地の神であり、領域を守護する地霊なのだという。

はたして私たち登山者が知って

いる山名は、彼らの呼名だろうか。いまいちど、自分の登る山の名前を土地の人びとに尋ねてみたい。

(柏澄子)

水越武・写真／小野有五・解説

水越武写真集

『知床 残された原始』



2008年1月
岩波書店刊 166頁
A4変形判 定価 6300円

この本を手にし、写真を見、解説を読んだその日、私は友人にあてて手紙を書いた。

「水越さんの新著を見ました。北海道移住20年間の体験が根底にあり、そのあいだに見てきた国内外の自然環境の変容が積み重なっていますから、最もふさわしい写真家の代表作になりました」。

彼はすぐ勤め先の大学に出入りする書店に注文を出したそうだ。

写真の内容は、春夏秋冬の四季に従って展開する構成になっている。この章分けは自然・風景を主にする写真集の常道ともいえるが

本書で異なるのは各章に明確な主役が設定されていることだ。

第1章の春は「潮間帯」で、これは満潮時には海面下だが干潮になると海面上に出る浅い海底をいい、潮が引いても岩礁の潮だまりには豊かな生き物が残っている。砂浜の少ない知床で、海と陸をじかにつなぐ潮間帯に、作者は多くの力を注いだ。第2章の夏に登場する「ヒグマ」もまた深く関わってくるからだ。秋は「植生の垂直分布と回遊魚」、冬は「流水」と4章が見事な連鎖を保って知床の生態系を伝えてくれる。

個々に見れば、口のまわりに母乳を白くつけた子グマは限りなく愛しく、流水の襲来に逃げおくれたシャチの死は、家族を失うに似た哀しみに包まれる。シャープなレンズの内側にある作者の肉眼の潤いがとらえたものだろうか。

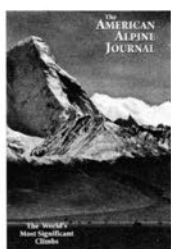
解説の小野有五さんは1月号のこの欄に著書の紹介があつて改めていうまでもないが、北海道で最も水越さんを理解する人である。その文の最後は——残された原始を北海道中にとりもどそう、それが水越さんからのメッセージではないだろうか——と結ばれている。

私は「北海道の原始は、オホーツクの海にクサビのように打ち込まれた知床半島に追い詰められたのか」とも言い換えてこれを読んだ。著者の作品に込められた渾身の力に添えて本書の装丁、製本は地味に抑えて堅牢である。すでに著者は岩波書店から同じ判型で『日本の原生林』『森林列島』『熱帯雨林』の3冊を出している。

岩波書店の創立者、岩波茂雄が1920年7月、わらじ履きの登山姿で剣の頂上に立つ写真を傍らに、水越さんの4部作がここで揃ったことを喜ぶ。

(杉本誠)

John Harlin III・著
『The American Alpine Journal
2007 (Vol.49, Issue 81)』



2007年
The American
Alpine Club発行
A5変形判 496ページ

07年版も世界の山の初登頂と初登攀記事が満載。写真もふんだんに配しているので手にとって眺めるだけでも楽しめるアメリカカ山岳

会の機関誌だ。

巻頭は英国山岳会150年記念行事(07年6月開催)に参加した編集長が、その話題に触れている。氷河の後退や環境問題ばかりが話題であり、山岳関係トップがいかにか地球温暖化問題を危惧しているかが窺がえたという。

第1部ではチョモランバ北西ピラー登攀、パタゴニアでのアルパイ・スタイル登攀、マッキンリーやフォーレイカなどアラスカでの新ルートやアルパイン・スタイル登攀、チョー・オユーの南西面登攀、バルトロ針峰群の登攀、天山での登攀、南極大陸での登攀など世界の岳人からの初登頂、初登攀報告が記されている。

また、1931年から2007年まで70余年にわたりAAJに登山記録や写真を提供し、マッキンリーの西面バットレス初登攀者、あるいは地図作成者として知られる故・ウォッシュバン氏の功績について詳しく述べられている。また気候変化の前線や環境問題についても論文がある。

この中で、「06年、チョー・オユー登山最盛期にチベットから雪原のナンパラを越えてネパールに越

境しようとした75人のチベット人のうち、1人が中国兵に射殺され、他にも重傷者がいたが恐らく亡くなったであろう。約40人は越境したが、残りは中国兵に捕えられた」と、この情景を銃声直後からBCで見ていたチョー・オユー南西面初登攀のスロベニア人の報告と隠し撮りしたチベットの子供達の写真は衝撃的だった。そんなことは知らずに私は翌年、チョー・オユーBCからテント・サイトの目前に展開されるナンパラの広大な雪氷原を往來する命がけの交易商人、ヤクのキャラバン隊の姿に感動していたのだ。

第2部「登攀と遠征」では北米から中南米、アフリカ諸国、アラブ諸国など、世界各国での登山情報事細かに記載、邦人たちも随所に登場している。登山者にとっては最新の情報が集約された貴重な文献だ。

第3部「図書紹介」では10数冊を紹介している。追悼、会務と続き、巻末には索引があり読者に便利だ。最後に投稿の要領まで記されている。

(南井英弘)



平成19年度第10回(2月度)理事会

日時 平成20年2月13日 18時30分

分 20時30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】宮下会長、鰐坂・神崎各副会長、吉永・宮崎・成川各常務理事、斎藤・岡部・石橋・古野・太田・相馬・山川・堀井各理事、深川・竹中各監事、日下田・河野・近藤各常任評議員、神長会報編集委員長

【委任】藤井理事

【審議事項】

1・海外登山基金審査結果(古野)

1月29日開催の審査委員会、次の4隊を助成(総額140万円)対象として推薦する。

①G登攀クラブ シシヤパンマ南西壁登山隊(隊長■新野泰之) 中国チベット・シシヤパンマ南西壁アルパインスタイル

報告

②HIMALAYA CLIMBING 2008

(隊長■平出和也) 中国チベット・ナムナニ南東壁(未踏) アルパインスタイル

③遙同人GIRGIRI BOYS インドヒマラヤ登山隊2008(隊長■一村文隆) インド・ナンダデヴィ山群カラシカ北壁(未踏) およびチャンガバン北壁アルパインスタイル

④信州大学学士山岳会 カンテガ峰登山隊2008(隊長■横山勝丘) ネパール・クレーンブ地方カンテガ北壁直登ルート(未踏) アルパインスタイル (承認)

2・写真資料使用許可願(宮崎) (有)写真工房より、河童橋上のウエストン夫妻と上條嘉門次、根本清蔵の写真「上高地帝国ホテル開業75周年記念特別展示「神河内」」に展示 (承認)

【報告事項】

1・寄付受付報告3件(吉永)

①年次晩餐会のフリーマーケット売上げの一部

②アルパインジャーナルへ

③自然保護のため

合計33万4260円也の寄付を受領した。

2・予算委員会の開催について(吉永)

2月19日(火)・29日(金)の2日間で平成19年度事業報告・収支報告書及び平成20年度事業計画・予算請求書のヒアリングを行なう。

3・民事再生手続開始の申し立てのお知らせ(吉永)

株式会社ブレインテックより民事再生手続に入る旨の連絡があった。図書管理用ソフト「情報館」のサポートは当面継続する。

4・「植村直己冒険賞」受賞者の発表(宮崎)

植村直己冒険館より2月12日(火)年間受賞者の発表をするとの連絡があった。

5・第27回総会案内(宮崎)

日本勤労者山岳連盟の総会が2月16日(土)・17日(日)に開催される。当会の行事と重なるため祝辞を送り欠席。

6・新ネパール大使歓迎会のお知らせ(宮崎)

3月7日(金)、(社)日本ネパール協会主催で開催される。神崎副会長出席。

7・第28回日本登山医学シンポジウムの案内(堀井)

5月31日(土)・6月1日(日)、黒部市宇奈月で開催される。多くの会員の参加を希望する。

8・日中韓学生交流登山さよならパーティーの案内(相馬)

2月27日(水)18時30分より国立オリンピック記念青少年センターで開催する。若い会員育成のためにも多数の参加をお願いする。

9・三支部合同懇親会報告(日下田)

千葉・栃木・茨城三支部懇親会が2月2日(土)、3日(日)、日光湯本で開催された。参加者、宮下会長・神崎副会長他40名。

10・ヒラリー名誉会員 追悼式・偲ぶ会(神崎)

2月29日(金)、ニュージーランド大使館主催で開かれる。

11・シンポジウム「現代登山とGPS」報告(堀井)

科学委員会主催で2月1日(金)に開催された。参加者76名。

12・会報「山」編集報告(神長)
13・2月度入会者1名

ルーム日誌

2日 自然保護委員会 科学委員
会

4日 総務委員会 学生部

5日 図書委員会 アルパインス
ケッチクラブ

6日 常務理事会 集会委員会
101の会 山岳地理クラブ

7日 指導委員会 学生部

8日 緑爽会 高尾の森づくりの
会

12日 海外委員会 アルパインス
キークラブ アルパインスケ
ッチクラブ JAC01会

13日 理事会 山想倶楽部 九五会
アルパインフォトビデオク
ラブ 山の自然学研究会

14日 山岳研究所運営委員会

15日 支部事務局担当者会議

16日 支部事務局担当者会議

17日 総務委員会 資料映像委員
会 101会

18日 財務委員会 学生部 アル
パインスキークラブ ゆき

19日 財務委員会 学生部 アル
パインスキークラブ ゆき

20日 三水会 101の会 つく

も会 山岳地理クラブ

21日 科学委員会

26日 千葉支部 インターネット
小委員会 アルパインフ
ォトビデオクラブ

27日 自然保護委員会 麗山会

28日 山遊会

29日 財務委員会

2月来室者631名

会員異動(2月)

物故

伊藤敏(4096) 08・2・11

竹本融司(7055) 08・2・18

石上隆章(7353) 07・12・18

西本正行(7932) 08・1・9

降旗厚(8692) 07・7・1

中田豊作(8900) 07・12・9

鈴木琢美(9221) 08・2・19

川島榮三郎(10584) 07・12・3

退会

鶴見敏彦(6371) 静岡

水上雅(7542) 福島

川井熙子(8360)

堀邦昌(10475) 信濃

高橋昭次(11333) 岐阜

北山久雄(11545)

星野結子(14014)

改名

左子敦子(13633) ↓長谷川敦子

図書受入報告(2008年2月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
阿部亮樹	イラスト・クライミング	200pp/26cm	東京新聞出版局	2008	出版社寄贈
出利葉義次(編)	岩棚——清水山岳会創立60周年記念特別号	131pp/26cm	清水山岳会	2008	発行者寄贈
信州大附属図書館(編)	岳都松本 小谷コレクション展——信州大学の名品	72pp/30cm	信州大学附属図書館	2007	発行者寄贈
河本卓生(編)	山と人 2008(第17号)	689pp/26cm	神戸大学山岳会・山岳部	2008	発行者寄贈
平田哲男(編)	大井正一物語	143pp/21cm	桐書房	2007	発行者寄贈
滑志田隆	地球温暖化問題と森林行政の転換	387pp/22cm	論創社	2007	著者寄贈
宮下弘	熱き山への憧憬	306pp/30cm	宮下弘(私家版)	2007	著者寄贈
宮下弘	四国霊場巡拝——生きる光を求めて	107pp/30cm	宮下弘(私家版)	2004	著者寄贈
Ongmu Gombu (ed.)	Nawang Gombu——His Life & Times through Media Clippings	184pp/35cm	Sherpa Buddhist Association	2007	N.Gombu氏寄贈

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N◆ヒラリ卿を偲ぶ記録映画「エ
ヴェレスト征服」を上映

資料映像委員会

エヴェレスト初登頂者で本会の
名誉会員でもあるエドモンド・ヒ
ラリー卿(88歳)が1月11日逝去
されました。今回、そのヒラリ卿が世界の
最高峰に挑んだ貴重なフィルム
『エヴェレスト征服』(1953年
第9次英国エヴェレスト登山隊の
長編記録映画・88分)を上映。故
人の功績を偲びたいと思います。
ぜひご参加ください。日時 3月28日(金)18時30分開始
場所 日本山岳会104号室
定員 先着40名
問合 羽田栄治(☎03-33399
-3975)まで

*作品解説 羽田栄治委員長

*参加費無料・申込み不要

◆やま学メールニュース会員募集

山の自然学研究会

当会では「山はどうして高くな
ったか」「山の自然はどう保護した
ら良いか」「上高地インタープリタ
ー」等をテーマとして活動し15年
になりました。メールニュースも
山行計画・自然保護の情報を伝え
て35号になりました。興味のある
方はご連絡ください。

☐yamagaku@googlegroups.com

◆熊野古道小辺路を歩く

集会委員会

これまで中辺路、伊勢路と歩き
ました。今回は小辺路・高野山・
熊野本宮までを計画。詳細は次号
に掲載します。

日時 5月31日(土)〜6月3日(火)

定員 20名

費用 約5万円(現地までの交通
費は別途負担)

現地集合・現地解散

新刊 ◎京の秘境・芦生の森ガイドの決定版!◎

由良川源流
芦生原生林生物誌

渡辺弘之 著/A5判/184頁/2100円

由良川の源流にひろがる京都の秘境・芦生の森に成
育する動物・昆虫・植物などを、四十有余年にわたり
観察・調査・研究してきた著者が、貴重な写真を
まじえて現況を紹介し、原生林の保全と保護を訴え
る。芦生研究林元林長による待望のガイドブック。

日本山岳会創立100周年記念出版

新日本山岳誌

日本山岳会 編

菊判/1992頁/18900円/クロス装 カバー掛け 函入
今世紀最新・最大の山岳事典。北は国後・択捉から、
南は南西諸島まで4000山を網羅。写真や地図をふん
だんに使った登路図の解説から、山名の由来、山の
信仰や歴史・民俗まで詳しく紹介する。

※日本山岳会の方は直接お申込みください。会員特別割引有り。

〒606-8161京都市左京区 一乗寺木ノ本町15 ナカニシヤ出版 TEL.075-723-0111
FAX.075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/〔表示価格は税込〕

◆第24回全国支部懇談会開催概
要 北九州支部本年度の全国支部懇談会を左記
の概要にて、北九州支部の主管で
開催いたします。

期日 10月11日(土)〜12日(日)

内容 ●11日 全国支部懇談会全
体会議、記念講演、懇親パ
ーティなど●12日 記念行事(福智山
登山、平尾台・貫山登山、
関門の歴史探訪を予定)費用 約2万円(懇親パーティ、宿
泊、記念行事参加の場合)

*詳細は追ってご案内します

聖山カイルスと仏教王国グゲ遺跡を巡る巡礼の旅

チベットの聖山
カイルス一周巡礼トレック

24日間

5月16日(金)〜6月8日(日)

¥788,000

7月27日(日)〜8月19日(火)

¥822,000



ATLAS TREK

株式会社

アトラストレック

(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

事務局職員 急募

本会事務局の職員を募集します。会員各位のお知り合いのなかで、事務局職員として適当な方がいらっしゃいましたらご紹介ください。欠員補充のため急いでいます。募集要領は下記のとおりです。

- 募集人員 1名(男女を問いません)
- 募集期間 平成20年3月20日～
- 年齢 原則として30歳以上50歳までの方
- 勤務時間 月曜～土曜(10時～21時の間のローテーション勤務、ローテーションにより週休2日確保、第2、4土曜休日)
- 給与等 本会規定による(賞与年2回、社会保険有、交通費支給)
- 必要書類 履歴書および紹介者名
- 面接日 3月20日以降、随時

*連絡先: 本会事務局 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441

◆土曜懇話会開催予告**集会委員会**

土曜懇話会は集会委員会の担当となり、再開いたします。

再開第1回となる今回は、上高地の山研で宮下会長を囲み、1泊2日で計画しました。

日時 6月21日(土)～22日(日)

*詳細は4月号でご案内します

◆エドモンド・ヒラリー卿追悼**「講演と映画の夕べ」****海外委員会**

エヴェレスト初登頂者のエドモンド・ヒラリー卿(当会名誉会員)を追悼する「講演と映画の夕べ」を開催します。世界最高峰への挑戦を時代背景とともに辿り、初登頂の意味、登山界への影響、ネパールの人たちに尽くしたヒラリー卿のその後の人生などを講演していただきます。貴重な記録映画も上映。会員だけでなく、高校生をはじめとする若い人たちの出席を歓迎します。

日時 5月9日(金)18時30分～21時
会場 国立オリンピック記念青少年総合センター、センター棟4階セミナーホール(東京・代々木)

講演 田部井淳子、松浦輝夫
映画 1953年英国エヴェレスト登山隊の記録

定員 300名
費用 500円(資料代)

申込 学生は無料
日本山岳会事務局

03-3261-4441

*入場チケットを配布

平成20年度 上高地山研の開所案内**山研運営委員会**

本年度は4月中旬より水道の敷設作業等を開始し、4月28日オープンを目標に準備しています。

開所期間は4月28日(月)から11月7日(金)を予定。ゴールデンウィークの宿泊予約はまたハガキで事務局まで申し込んでください。

昨年度より「ウィークデー割引」をとり入れたこともあり、利用者は736名(うち支部会員236名)と前年を上回りました。今後は、1階資料室をくつろげる空間にし、ゆっくりと休息していただける滞在型を検討中です。

今年も山研をご利用ください。

平成20年度 行事予定 集会委員会

5月31日～6月4日	熊野古道 小辺路(高野山～熊野本宮)
8月8日～12日	北アルプス(小屋泊まり) 薬師・水晶・烏帽子
10月3日～5日	南八甲田 赤倉岳・葛温泉
11月1日～3日	大和三山 畝傍山・天の香具山・耳成山
12月7日	晩餐会記念登山(未定)
1月10日～12日	スキー懇親会 樺池高原(スノーシューも計画)
1月28～2月5日	海外登山 タスマニア

◆編集後記◆

●3月を迎え、春らしい暖かい日が続くようになってきました。今月は久しぶりに、24ページの盛りだくさんな内容になりました。

●1月号の『山』で、宮下秀樹会長は年頭の課題として、「公益社団法人化」を取り上げられました。公益社団法人の実態はいかなるものか、現状はどうなっているのか、わかりづらい点が多々あります。難しい問題が多いだけに中間報告してもらい、会員の皆さんと共有化していきたいと思っています。

●『日本山岳会百年史』が刊行されたときもそうでしたが、『山岳』がただ読まれていたのかちよつと不安になります。そこで今回は、『山岳』の書評ページを作ってみました。書棚から出してきて、ぜひ読んでほしいと思います。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 754号

2008年(平成20年)3月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社